

卷之貳
羽黒山をめぐる
前編



羽黒神社 東参道 烏居付近 — 解説 P.29 以降参照 —

巻之式(前編) もくじ

はじめにー羽黒山の由来と変遷物語 ……………

奈良時代ー玉の島 平安時代ー阿弥陀山

江戸時代ー羽黒山 明治以降の推移

清瀧寺縁起と清瀧寺

23

〔壹〕 東参道を登る

お参道入口の石造物 ……………

①鳥居 ②狛犬と台座の銘 ③石灯笼

参道資料編 鳥居考・狛犬考・灯笼考

29

〔二〕 澄月の歌碑

副碑に曰く 僧澄月略伝 澄月出家の逸話

33

〔三〕 玄溪鎌田翁碑

碑文全文と解説 鎌田玄溪略伝

35

〔四〕 左京亮水谷侯嘉績詩碑

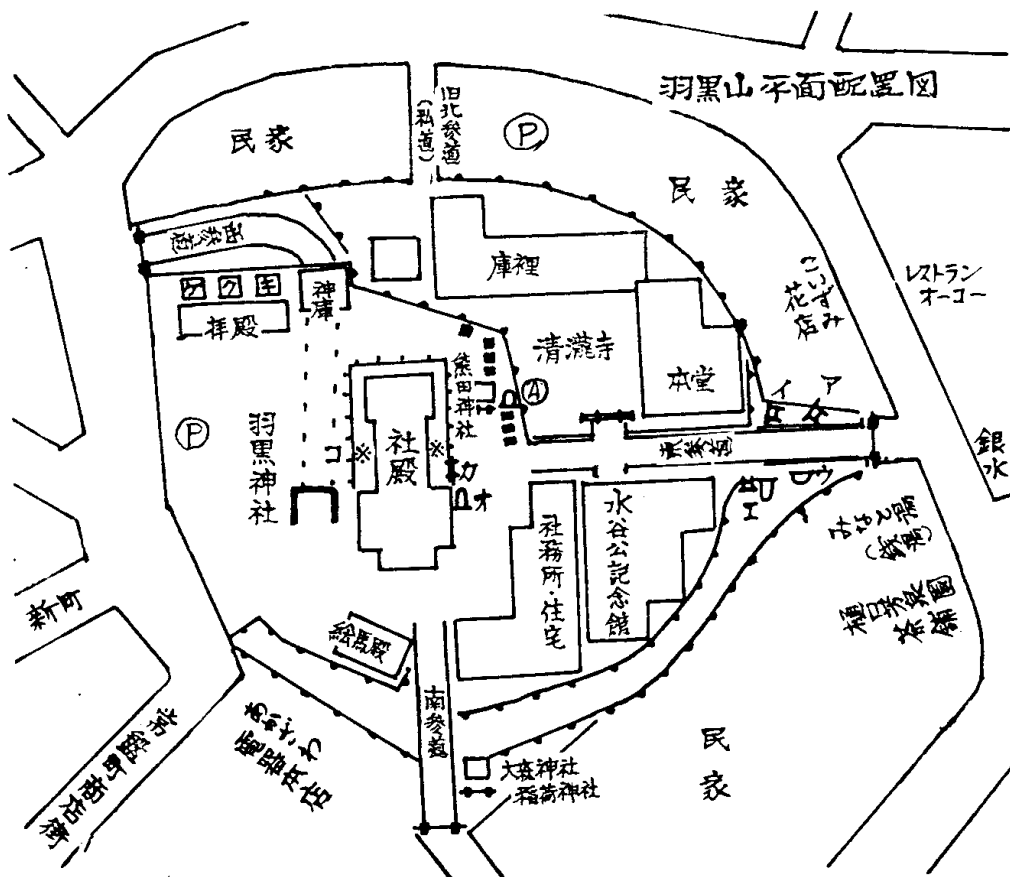
詩碑全文と解説 水谷勝宗略伝

39

補足資料「写真四史」

幣帛使昇殿門 澄月歌碑と鎌田翁碑 水道紀功碑解説

41



- ア 羽黒神社・撰社 祭神と由来案内板
- イ 清瀧寺縁起 案内板
- ウ 澄月歌碑
- エ 玄溪鎌田翁之碑
- オ 左京亮水谷侯嘉績詩碑
- カ 石門(幣帛使昇殿門)
- ④ 熊田恰公彰徳碑
- キ 八幡宮・和霊宮
- ク 住吉宮・水谷宮
- ケ 菅原宮
- コ 水谷勝美侯奉納六角石灯笼

はじめに

— 羽黒山の由来と変遷物語 —

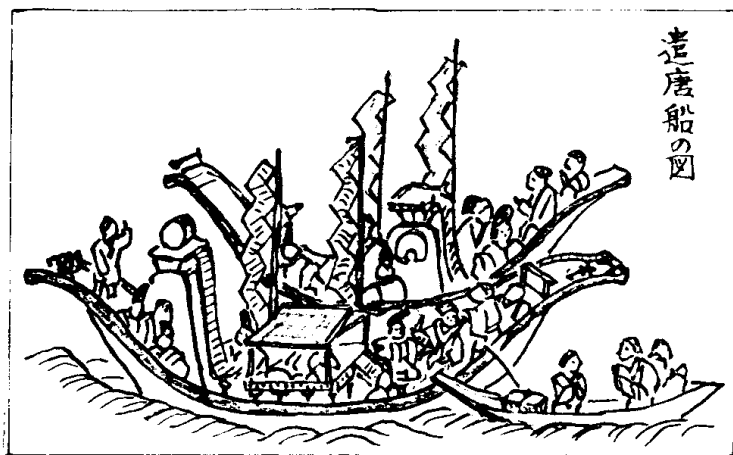
奈良時代—玉の島—

千三百年ほど前の奈良時代に都にまでその名を知られた「玉の浦」と称された羽黒山周辺の海（巻々『万葉歌碑』の項参照）は、当時瀬戸内海を柱とみなした船にとっては、潮待ちや給水などのための重要な碇泊地であったと考えられる。

羽黒山もまた当時は周田三ノ口ほど高さ一〇呎ほどの小さな島で、島の周囲は小石がゴロゴロする荒磯であったと想像される。

さらに神功皇后の伝承故事では、皇后がこの島で真白な光りかがやく珠を拾い瑞祥として喜ばれて「玉の島」と名付けられたといひ、周辺の海をもそれに伴って「玉の浦」と称されるようになったという。

瀬戸内海では今も昔も、満潮時に



遣唐船の図

は東は紀伊水道から、西は豊後水道から外洋の海水が勢いよく流れ込み、東からの流れと西からの流れがほぼ岸中部に当る玉の浦付近の海上でぶつかり合う。干潮時には逆に玉の浦を境にして東と西に分かれて引き潮となって海水が流れ去ることになり、ちやうど玉の浦が潮の境目となる。

古代の船はこの潮の流れを利用して瀬戸内海を航行していた。大和から九州へ向う船は満潮時の潮の流れに乗って西へ進む。

玉の浦では潮の流れが変るのを待つて、ここからは引き潮に乗ってさらに西へ進むことになる。九州から大和に向うにはこの逆の流れを利用することになる。

熱田津爾ニギハヤヒ 船乗世武登フネノリセムト 月待者ツキマテバ
潮毛可茶比沼シホモカチヒヌ 今者許藝乞菜イマノコヨリギキナ
万葉集に額田王ヌケノミの作とあり、六六一
年百濟救援のため奇明女帝自ら軍を
率いて西征の途に、今の四国松山付

近から潮流の様子を判断して北九州へ向けて船出する情景を詠んだものといわれている。

さらに平安時代終りごろ備中
国主基歌に『貢物はこぶ舟
もこぎ出よ もたひの泊りし
ほもかないぬ』というのがあ
り、今の富田地区龜山で当時
盛んだった龜山焼の火がメを
積んだ船が、龜山の港から潮
流に乗って京の都へ向けて船
出する様子を詠んでいるものも
ある。

目的地へ向けて都合のよい
潮流を「潮がかなう」と云い、
古代人の潮に期待する気持ち
がよくうかがえる。

潮の流れに乗って船を走
らせた古代にあっては、潮
目に当る玉の浦が潮待ちの
海であっただけでなく、「水島」と呼ばれて清
水の湧く泉を持った柏島や乙島が控えていて、



東参道脇にある清龍寺縁起説明板より

給水にも大へん好都合な
ところでもあったといえ
る。

平安時代

— 阿弥陀山 —

推古朝以来平安初期ま
での二百年以上もの長い
間にわたって、古代日本
の政治や文化に大きな影
響をもたらしした遣唐使：
：その一行六百余人が分
乗した四隻の遣唐船は往
復の都度、潮待ち給水の
ために玉の浦に碇泊した
と考えられる。

唐使が派遣された。
こうしたなかで平安初期に承和の第十七次遣
唐使が派遣された。

二度の渡航失敗、そして使節団の半数近い二百数十人の犠牲などとまさに波乱万丈の旅であった。かくして三度目の渡航が承和五（八三六）年であつたが、それも艱難辛苦の末にやつと唐へたどり着くことができた。

今回は特に使節団の高僧には度者（どしや）（得度を受けた僧）を賜わり、自分たちに代つて度者に精進してもらい、仏の力にすがつて渡海の無事を祈願することにした。さらに一度目の渡航に際し朝廷では天智・光仁・桓武の天皇陵と神功皇后陵に幣帛を奉獻して、遣唐使人の航海安全と無事確実な帰国を祈願させた。

三度目の渡航に當つては九州の国内から精進誡經・意志健固な壮年九人をえりすぐつて出家させ、香龔宮・宇佐八幡宮・阿蘇神社など五社に配置し、国分寺及神宮寺がこれに供養授け、出発の日から帰還の日までの間仏道に専念させ、遣唐使の平穩無事であることを祈らせるなど大へんな念の入れようであつた。

それにもかかわらず神仏の加護にはなかなか

恵まれなかつた。

この使節団の中に、後に慈覺大師の諡号を授けられた天台僧円仁が入唐求法の念に燃え、密教の奥儀とさまざまな佛法を究めて日本に持ち帰るため留学僧として隨行していた。

そしてはしなくも、渡海のかくも残酷なまでに厳しい現実を身をもつて体験するに及び、僧円仁もまた仏の慈悲と加護にすがつて大願成就を願ひ、天台の本尊阿彌陀如来を祈念しつゝ、自らの手で一刀一刀念仏を唱えながら阿彌陀像を刻んだであらうと想像する。

かくして三度目の渡航に際して命運をこの阿彌陀像に託して、潮路の岐点を我が命運の岐点と定めて「玉の島」の頂に安置し、成否をかけて祈つたものと考えられる。

これより後、その靈驗にあやかろうとする玉の浦の漁民や沖行く船人たちの崇拜を蒐め、いつしか阿彌陀島又は阿彌陀山と稱されるようになったと推測される。

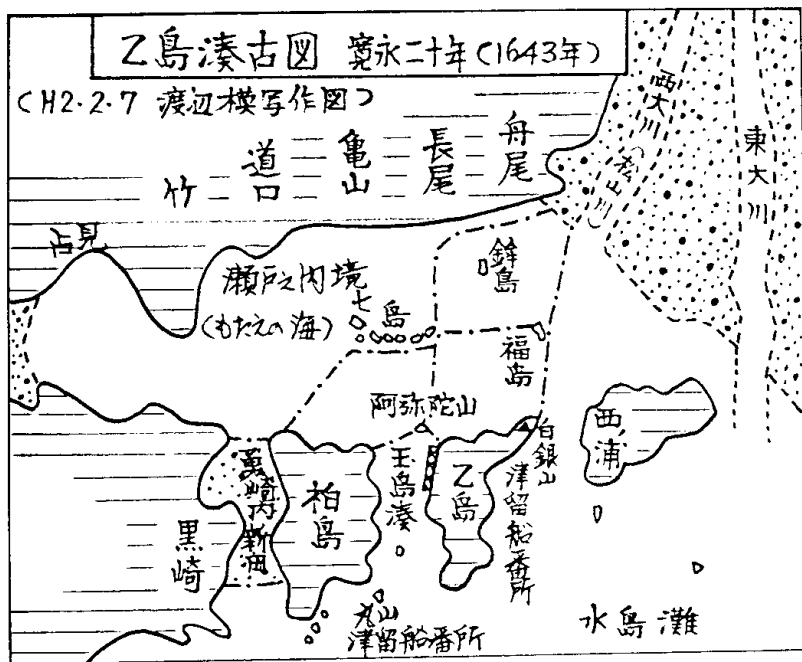
慈覚大師の事績伝承によると、玉の浦の夜の空を飛ぶ不思議な光にさそわれて、柏島の西山で土地の人が柏の霊木と崇拜する古木のほら穴で光る十一面観音を拜し、古木を刻んで十一面観音像を彫り安置したのが本覚寺のほじまうといひ、仏に供える阿伽水^{あがみ}を汲んだ跡を後世赤崎と呼ぶようになったと伝える。

十年に及ぶ唐での留学研鑽を終えた慈覚大師は承和十五年無事帰国した。

この時、玉の浦が氣にいつていた慈覚大師は玉の浦から見上げる遙照山を京都比叡山につぐ第二の聖地として養子山と名付け、養子三千坊と称される天台密教の一大聖地の基礎を作ったといわれ、平安時代後半から鎌倉時代にかけて養子山（遙照山）の周辺をめぐる谷々に大小の寺院や堂塔が軒を連ね、西日本の天台密教道場として繁栄を極めた。

しかし、戦国乱世を経て荒廃し、現在では六条院の明王院が僅かに昔日の面影を思わせている。

また、浅口郡西部に現代も天台寺院が集中的に多いのも慈覚大師の由縁によるものであるといえる。



江戸時代 — 羽黒山 —

江戸時代初め寛永十六（一六三九）年備中成羽藩主となった水谷勝隆が備北地方の物資輸送の基地として成羽城下の外港を阿弥陀山の対岸乙島村矢出に船着場を築造、玉島湊の開発・発展に力を入れた時から様変りが始まる。

（巻之七「水谷勝隆の胸像」の項参照）

寛永十九（一六四二）年

備中松山藩主となった勝隆は、幸にも成羽領だった浅口郡乙島・柏島・黒崎の各村はそのまゝ、松山領に組み込まれて引継ぐことになった。

これに力を得て船穂新田を開発・引続いて南に広がる玉島新田の開発大事業を決断した。

万治元(一六五八)年新田開発の無事達成と玉島
 湊の繁栄を祈願するため、水谷家の守り神とし
 て崇敬してきた羽黒大権現を玉島を一望におさ
 める阿弥陀山に祀り社殿を建立した。そして
 阿弥陀山を羽黒山と改称し、以後玉島の守護神
 として住民に限らず、遠く北前船で回航する多
 くの人たちの崇敬をあつめてきた。

さらに勝隆は弟で京都青蓮院門跡であった仙
 海和尚に依頼して、阿弥陀山の由来となった慈
 覚大師いわれの阿弥陀如来を本尊とする清瀧寺
 を羽黒大権現の別当寺として開山し水谷家の祈
 願所とすると共に神仏習合の山として羽黒山は
 繁栄した。

天海僧正との出逢い

会津の人といい、若くして天台僧となった天
 海和尚が関東で布教活動中、常陸国下館城で勝
 隆の祖父治村は天海と出逢い、その非凡な人格
 に深く心服し二百石を寄進して師事したのが始
 まりという。その後、天海和尚は徳川家康の
 知遇を受けその懐刀となり、秀忠・家光三代に



清瀧寺山門 —— P.24写真 清瀧寺縁起参照 ——

重用されて、勝隆が松山城主となった翌年一〇八才で死去したという。

祖父以来の誼で天海和尚と親しかった勝隆は、天海が秀忠の命によって東叡山寛永寺の創建に当って、西の叡山に琵琶湖があるように、東叡山にも不忍池を造ってはと進言し、率先して工事を受け持ったといひ、さらに琵琶湖に倣って池の中に弁天堂をも建てたという逸話も残る。

このような関係から勝隆の弟仙海は東叡山寛永寺の天海和尚に師事し、後、比叡山に上り頭密両業を学んだと伝えられる。

二代勝宗は父勝隆の遺志を継ぎ仙海和尚を京都青蓮院から招き羽黒山清瀧寺を關山したといふ。

明治以降の推移

明治維新後の神仏分離令により羽黒神社と改称し、さらに清瀧寺とは分離され、それぞれ独立して現在に至っている。

また明治四〇(一八七〇)年廢藩置県に伴って備中一円の統轄支配のために県庁所在地をめぐって

玉島羽黒山が第一候補地に挙りひそかに調査団によって実地検分が行われた。

備中の中心に位置し、海港が開け交通に便というのが主な理由であったが、羽黒山の坂道の登り降りに大へん不便なこと、さらに羽黒山周辺の市街地が低湿地であって条件が悪いという理由から除外された。そして急遽調査団は第二候補地の笠岡へとび、笠岡を県庁所在地と決定し旧代官屋敷を県庁舎とし、名も小田県としたいささつがあるが、地元玉島の人でも知る人は少ない。

その後、清瀧寺には玉島町役場が置かれ、羽黒山が半世紀近くにわたって町政の中心地となったが、これも世代交代のはげしい今となっては知る人もまれになった。

- ① 明治6~8年
啓蒙所
(玉島小学校前身)
- ② 明治9~20年
玉島区裁判所
- ③ 明治11~大正11年
浅口郡役所
- ④ 明治35~昭和19年
玉島町役場
- ⑤ 昭和19~26年
玉島図書館

東参道を登る

〔あ〕参道入口の石造物

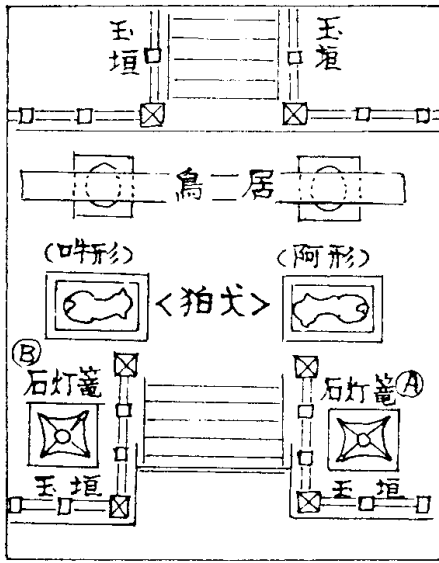
|| 石鳥居は昭和初期の建立で新しいが、こまぬ狛犬
一対と石灯笼一対はともに江戸時代終りごろ
の建立で古いもの || P.21 写真参照

①鳥居……明神型石鳥居

銘

大願成就 昭和十一年五月吉祥日 神社に左柱
願主 福武敏重建之 原拜石作 向つて 右柱

大願成就のお礼寄進と考えられるが
経緯などは不詳



東参道入口平面略図

②狛犬と台座の銘

阿形あがまう（口を開いた獅子）



獻 奉

中屋金左衛門
房屋文五郎
松屋藤太郎
松屋爲之丞
玉屋文次郎
藤屋忠兵衛
大坂屋治助

（正面）

寛政三
亥年
五月
建之

松積寄進
當所
淀屋金兵衛

（背面）

吽形うんがまう（口を閉じた狛犬）



獻 奉

丹屋栄左衛門
大黒屋八
池北屋子女兵衛
加登屋次郎左衛門
大坂屋助次郎
宮島屋久助
島屋龜四郎

（正面）

寛政三
亥年
五月
建之

細工人大坂
西橋堀
名田屋
玉良兵衛

（背面）

阿形の中段右側面
吽形の中段左側面

市場を独占してきた阿波の藍が、各地で盛んになった藍生産に不安を感じ、寛政三年(一七九一)大坂に進出した阿波藍問屋仲間が商売繁昌を願ひ、大坂で地元石工職人に作らせた狛犬一対も、玉島湊の渡屋金兵衛(藍株問屋の回船業者)が船に積んで運び羽黒神社に奉納、備中綿集散地玉島に阿波藍のアピールをしたと考えられる。

③石灯笼

— 竿にかかれた銘 —

左側(前ページ平面図④)

側面右…寛政五癸丑年九月日

正面…永代常夜燈

側面左…施主構中

背面…願主 高橋忠四郎導高

右側(前ページ平面図⑤)

側面右…施主 松山高瀬講中

正面…永代常夜燈

側面左…寛政八丙辰年九月日

背面…(銘なし)



石灯笼は形・大きさ・材質など同じと思われるが、建立の時期に何年かの開きがあり、一基ずつ相前後して寄進されたものと考えられる。しかしその経緯などはわからない。

松山高瀬講中寄進の石灯笼(後方より写す)

その一・鳥居考

① 日本独特のもの……神社の参道入口に建

つ門で、単純な形式で神社の象徴になつてゐる

② 起源・語源にはさまざまな説がある……二本の柱の上にしめ縄を渡した「しめ柱」が祖形といれる。

③ 社格の競争や地方的な伝統によつて種類が増えた

——平安初期の「延喜式」によつて鳥居の制式が定められた——

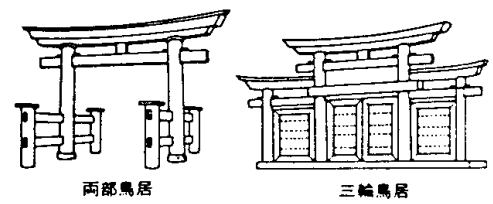
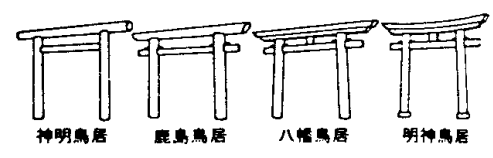
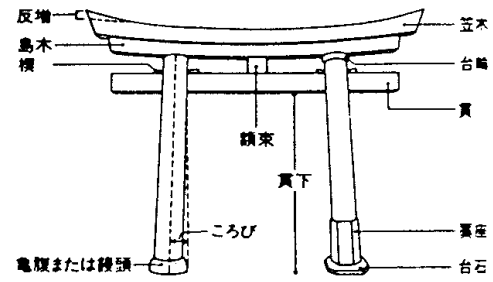
。神明式(伊勢神宮)鹿島式(鹿島神宮)が簡素で古い形式、次いで八幡信仰が盛んになり八幡式鳥居が出現した。

。中世以降に出現して最も普及した形式に明神式鳥居がある。これに丹敷をほどこしたものが稲荷式鳥居である。

。また神仏習合説が強くなった平安中期以降には両部鳥居と呼ばれる形式も出現した。

④ 一般的には明神式鳥居が多く見られる。(宮島の厳島神社が著名)

【鳥居】図一部分名称と種類



その二・狛犬考

① 狛犬は元来獅子を表現するものであった。宮中・陵墓・神社・仏閣などの聖域を守護し、邪悪の出入を禁ずる目的をこめて置かれた鎮敷。

——起源はインド・中国などに由来。古代の日本では異形の形を犬と思ひ、日本犬とは違ふ異国の犬(高麗の犬)と考えた。

② 平安時代には明確に狛犬と獅子とは区別された。宮中では御帳前や天皇・皇后の帳帷の鎮子として獅子と狛犬が置かれた。口を開いた(阿形)のもの、口を閉じた(吽形)の頭、一角をもつものを狛犬(人の邪正をよく知るといわれる獅鬚という獣)として右に置いた。

③ 現存する鳥居の多くは江戸時代以降のものが多い。

④ 古くはヒノキ・スギの木材を主体とした。時代が降ろにつれて石が使われるようになった。江戸時代には銅・鉄・陶なども使われ、大正時代からは鉄筋コンクリート製の巨大なものも出現するようになった。

・新しいものの中には、吽形の狛犬の頭に角が無く、獅子をかたどったものもよく見かける。

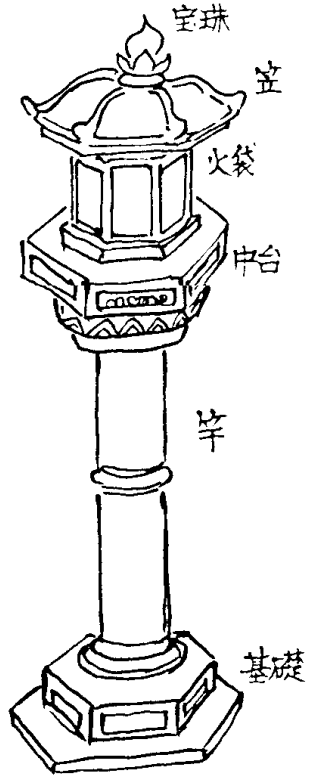
その三、灯笼考

② 戸外用の灯火器で灯笼といえは石灯笼を指すことが多い。――風食・破損しにくいこと、石の素朴さが茶人に好まれた。

○材質から：木灯笼・陶灯笼・金灯笼・石灯笼など

○形状から：台灯笼（置灯笼）・立灯笼とも言う
 釣灯笼――春日大社回廊の鉄製釣灯笼が著名

① 置灯笼の構成部材の名称



春日形石灯笼

・材質はすべて同じものを使用するが石灯笼の中で火袋が木製なるものは石の火袋が破損して後補したものである。

④ 灯笼の形式名……さまざまな名付け方がある
 ○寺社名……春日形・西円堂形・当麻寺形など
 ○庭園觀賞用――茶人名……利久形・織部形など
 「形状名……雪見形・琴柱形など」

⑤ 元来は仏寺の堂前に献灯したものの

・古くは堂前中央に一基を建てた
 室町時代以降、一対・二対と数を増すようになった
 ―東大寺大仏殿前金銅製八角灯笼―

・平面の形も本来は八角形であった
 時代が降るにつれて六角形・四角形・三角形・円形・自然石形など異形多様になった。
 特に庭園の点景として用いられるようになってからは、庭園觀賞用としてさまざまに形を変えていった。

・平安時代以降、神社建築が盛んになるにつれて神社にも取り入れられた。
 常夜灯と称し平面の形が四角形・簡素な造りに重厚さをもったものが多い。

〔い〕 澄月の歌碑

副碑に曰く

歌人澄月は玉島の南
峯に生まれ大成して
平安和歌四天王の一
人と称せられ

産土神羽黒神社に

民の戸をまもるや
世々の羽黒山かげ
しく海のふかきち
かひに

寛政七年八月三日 澄月

この和歌を献詠され
てより二百年を経

茲に記念して哥碑を
建てる

裏銘 平成七年八月吉日

發起者一四名

(氏名略)

澄月の歌碑(左)と副碑(右)



僧澄月略伝

正徳四年(一七二四)浅口郡玉

島村の木下家(説西氏)に生

まれる。幼くして出家し

天台宗円乗院に入る。

十三才の時比叡山に登つ

たが、当時心服する碩学高

徳の僧なく失望して下山。

志を一変して風流文雅の道

を志す。

武者小路実岳の門に入つ

て和歌を修め、洛東岡崎村

に閑居して垂雲軒・醉夢庵

と号し文人墨客と交友した。

そのころ、小沢蘆庵・伴

蒿蹊・僧慈延とともに平安

歌壇の四天王と称せられた。

寛政十年(一七九八)五月八十

五才をもつて没す。墓は京

都二条川東 善香院にある

という。

澄月出家の逸話

物心ついたころから玉島の綿屋と号する商家に
丁稚奉公に出され、度々倉敷の銭屋と号する商家
へ使いに往復させられた。その銭屋の年とった
下女が大へんえらそうに横柄でつらく当った。
度々のことに遂にがまんできなくなり、何とか
立身出世してこの老下女をみかえしてやりたいと
の一心から、にわかに出家して乙島円乘院の僧徒
となつて修業にはげんだ。

或る時、同じく修業にはげむ若僧の一人に、急
け心が大きく修業に身のはいらぬ者がいた。

住職の和尚遂にたまりかねて、大声でこの若僧
を叱つた。

「お前は年も既に大きく、この寺で修業する若僧
の中では一番の年長者、ところが一向に修業に身
がはいらないばかりか、このところ成績も上らな
い。一体どういうことなのか……」

少しは見習え。あの澄月はまだ十三才の小坊主
だぞ。けれども修業にはげむことはお前よりも格
段と上ではないか。

朝は誰れよりも早く起き出し、夜はまた衆僧の
一番後に床に就く。そして経を読み、勉強手習
いとはけむ刻苦勉勵の姿はお前もよく見て知っ
ているはずじゃ……

その上、この寺院内の掃除から台所の小役まで
実によくこまめに働き、知りつくしている。

彼のような者がいずれ近いうちに、この寺院の
ような大きな寺の住職ともなつて立身出世するで
あろう。お前のような墮落者では小さな庵主に
なるのもむずかしいだろう……」と。

かたわらでこれを聞いていた澄月は独り心の片
で思うには、「私が朝は早くから夜も遅くまで苦
学修業にはげんでゐるのは、天下の高徳知識とい
われる僧侶となつて、衆生を濟度することが終世
の願いである。それをこのような寺の住職とし
て安住したいとは、考えてもいけないことだ……」

かくして澄月は心に決することあつて円乘院を
去り、京都にのぼり比叡山に入った。

しかしながら期待
してゐたことに反し、
墮落した叡山に全く
失望して下山する。



〔一〕 玄溪鎌田翁碑

碑文——全文漢文体——

石碑の上部に篆字で、書いた額字

陸軍騎兵中尉正五位勲六等子爵板倉勝貞篆額

(川田登江)

亡友川田毅卿欲銘其鄉先生玄溪翁いしづみ不幸病終 翁

(三島毅)

故舊門人屬之余余亦知翁者誼不得辭 翁諱博字子

いみな(生前の實名)元服後の

(通称)

(號)

(現総社市新井)

亡父

亡母

文玄溪其號備中下道郡新莊村人考諱毅號由齋妣明

石氏考業醫而好儒翁少受教家庭 天保戊戌春游大

つちのえいぬ

(物徂徠)

阪聞物氏說藤田東咳既又游江戸入昌谷精溪門歸洛

(洛陽)

(之學)つちのこ

聞己亥冬歸鄉襲家業非所好 癸卯歲遂讓家於弟移

みすのこ

塾を開く

住淺口郡玉島下帷授徒毅卿實以此時入門稱俊秀

余偶訪翁始與毅卿締交毅卿之學基礎既成翁勸游學

みすのこ

(板倉勝貞)

(學校)

江戸廣其才識 嘉永癸丑松山藩主板倉公設御學于

玉島命翁為教師尋許稱姓帶刀賜二口俸居數年列士

二口俸(年に米三石)

籍加二口俸 時毅卿與余並應藩聘任用交薦翁 慶

碑文を讀みとく

亡友川田毅卿は其の郷里の先生玄溪翁の碑文を銘さんと欲せしむ不幸にして病に死す 玄溪翁の旧門人に属する余 余もまた翁をよく知る識もあつて辞退することを得ず

翁の生前の名は博通祿子文 玄溪はその号で備中下道郡新莊村の人 亡父の名は毅号を由齋 亡母は明石氏の女亡父は医を業とし儒學を好む 翁幼少のころ家庭で教を受ける

天保九年(一八三八)春大阪に行き藤田東咳から荻生徂徠の學説を聞き さらに江戸に行き昌谷精溪の門に入り程朱の學に帰服する 天保十年冬郷里に帰り家業をつぐが好むところにあらず

天保十四年遂に家を弟に譲り淺口郡玉島に移住し家塾を開いて子弟を教える 毅卿は此時入門して俊秀と稱されるに至る 余は偶然翁を訪ね始めて毅卿と出会う交友を結ぶ 毅卿の學問の基礎が完成し翁は江戸に遊學して其の才能知識を一段と広めることを勸む

嘉永六年(一八三三)松山藩主板倉公玉島に郷校を設け翁に命じて教師と為す ついで稱姓帶刀を許し二口俸を賜う 居ること数年にして藩士に取り立てられ二口俸を加増 この時毅卿と余ともに藩の招きに応じ交の任用は翁の推荐するところ

應丙寅賜八口俸陞中小性爲有終館督學移居松山未

數年世局一變藩亦尋廢 毅卿與余又前後官於朝

翁則隱居于久代山中玄溪不復出時游四方放浪山水

優游閑適以送殘年 明治二十五年壬辰二月二十五

日病歿于播州赤穂郡鹽屋村葬郡中坂越村興福寺塔

去文政元年戊寅之生閱七十四年矣 配川井氏產

四男二女先長真一郎嗣次男次郎孺次賢三郎次常

三女皆嫁 賢三郎好學會入余門爲都講既歸下帷玉

島後翁僅九閱月而夭家學亦絕惜夫 翁爲人炯眼

巨口一見可畏而其中和易恬淡所嗜唯書與酒耳 然

能甘寒素村醪鹽鼓陶陶然於腐爛冊子之間 學涉經

史善詩而守尤適逸 家元不甚富不能久遊學是以教

學相半親生徒如朋友攻究切磨不忍才不捨長謙虛自

慶應二年(一八六六)八口俸を賜わり中小性に昇進し藩校
有終館の督學となり移りて松山に居る いまだ年を
數えざるに世局一變し藩もまた廢す 毅卿と余もま
た相前後して新政府の役人となる

かくして翁は久代山中の奥深い谷間に隱居し再び世
に出ることはなかつた 時に四方を旅し山水の間に
放浪して優遊閑適以つて余生を送る 明治二十五年
二月二十五日播州赤穂郡塩屋村にて病歿し同郡坂越
村興福寺の墓に葬る 文政元年に生を得て實に七十
四年をかぞえるかな

翁の妻は川井氏(のち)で四男二女を産む 先に亡つた
長男真一郎が嗣ぐ 次男次郎は二十才をまたずに死
ぬ女に賢三郎次に常三 女は皆嫁ぐ 賢三郎は學問
を好みかつて余の門に入り師範役までになる そし
て玉島に帰り塾を開くが翁に後れること僅かに九カ
月をかぞえるばかりにて若くして死す 鎌田家伝統
の學問がまた絶えることを惜むかな

翁の人となり炯眼大口で一見してこわそうだが内面
はおだやかで無欲 たしなむところは酒と書のみ
まことによく清貧にあまんじに酒と塩納豆に心
豊かに樂しみ読書三昧にひたる 學ぶところは広く
經史に及び詩をよくしとりわけ字は道逸 元來家が
貧困なため長期の遊學ができた 此のため共
に學び教えあい生徒を視ることは朋友の如くに切磋

益其業老而益進是其門下所以能出毅卿也

(位階) (従三位)

毅卿以才學傾動朝野班陞三位官至宮中顧問

以顯翁翁之榮亦大矣 毅卿而在應如何稱揚

之而余不文聊叙所知係之 銘曰

出藍青於藍 無藍何以青

誰謂毅卿學 不由翁而成

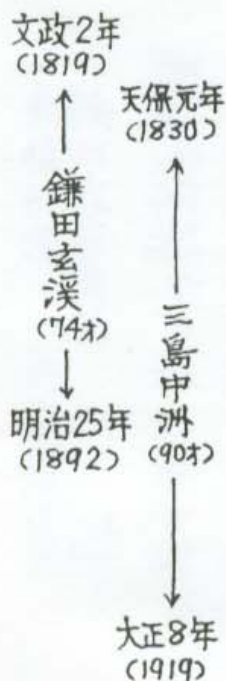
明治四十五年六月

東宮侍講從三位勳二等文學博士

三島 毅 撰

日向奥邸直康 書

大正四年三月門人故舊建之



玄漢鎌田翁碑(黒い碑)と文要説明板(右手前)

琢磨の研究態度で才能ある人の意見をきき人の長所を撰取し謙虚に自益する この故に老いて益々學問が進歩 このことが門下に毅卿が出現する要因ともなった

毅卿はその才學を以って朝野の人々を開化し従三位に叙せられ宮中顧問官となり翁の功績を顕し翁の榮譽また大なるかな 毅卿をしていかに之を稱揚して応えるか 而して余無學聊知る所を叙して之に係る 銘して曰く

藍を出で藍より青し 藍無くして何を以って青からん 誰れか謂う毅卿の學 翁に由らずんば成らず

鎌田玄溪略伝

現総社市新本の人、号「玄溪」は晩年文代くしろの
 現総社市文代の奥深い谷に隠居したことに由る
 という。父の名は毅、由斎と号し匠を業とし
 儒学にも堪能。玄溪幼少のころは専ら家庭で教
 えを受けた。

天保九年二十才の時始めて大阪に行き藤澤東
 暎から物狙狹の学説を聞き、さらに江戸へ行き
 昌谷精溪の門に入り程朱の学に深く引かれる。
 翌年帰郷し家業を継いだ。が性に合わず、天保
 十四年二十五才の時遂に家を弟に譲り、玉島に
 移住して塾を開いた。

嘉永六年松山藩主板倉勝静が郷校を玉島に開
 設し、玄溪はその教授となり藩士に取り立てら
 れた。慶応二年四十八才の時中小性に昇進し
 藩校有終館の督学となり松山に移り住んだが、
 明治維新の政変により退いて文代山中に隠居し
 て再び世に出ることはなかった。



玄溪鎌田翁碑 大略解説板

〔二〕 二代藩主藤宗
左京亮水谷侯嘉績詩碑

|| 詩碑全文 ||

賢哉水谷侯

優れた成果

嘉績世永傳

授産乃為先

慧眼相玉島

地相をみる

移民勸稼穡

耕作と收穫

井井畦畛連

区画の正しき田地の境

春緑麴變地

大麦

秋白綿花天

ハオサク

逐時氣運開

日見滋人煙

シゲル

港灣環粉壁

白壁

聯櫺列肆塵

四角な枠で囲んだ木

物質盛集散

(資)

南北東西船

自是公之逝

二百五十年

一鄉懷德澤

仁徳の潤い

老少聚山巔

山頂 いたゞき

夙抱治安策

海をうすめる

填海而墾田

テシカイ

酒を地に注いで神を祭る
春風酌酒處
花暎祠堂前
(映)

昭和十三年水谷公二百五十年祭日賦此

柚木方啓并書

昭和十三年十一月奉賛会建之(裏銘)

左京亮水谷侯嘉績詩碑(羽黒神社拜殿東側外)



東参道を上りきると真正面に眼にとびこんでくる

|| 詩碑を讀む ||

賢なるかな水谷侯 嘉績世々永く伝わる つと
 に治安の策を抱き 産を援けてすなわち先とな
 す 慧眼玉島の地をよく見 海をうずめて田を
 ひらき 民を移し農業を奨励す 区画正しい田
 地が連なり 春は緑一色に麦が地を変え 秋に
 は白一色に綿が天に花さく 時を逐つて氣運も
 上昇し 日々人煙の数を増すを見る 港灣には
 白壁の蔵がめぐり、縦長の看板が商店の軒先に
 列なる 物資の集散盛んにして南北東西に船が
 行きかう 水谷公の逝去よりこの方二百五十年
 まちをあげてその徳澤を懐い親しみ 老若男女
 が羽黒山頂に集まる 春風駘蕩祭祀の庭 桜花
 爛漫社殿の前

▲ 水谷勝宗略伝 ▼

元和六(一六二〇)年 江戸屋敷にて勝隆の長男と
 して出生、左京亮を稱す。寛文四(一六六四)年五
 万石の遺領を継ぎ、弟勝能に小坂部二千石を分
 与し分家せむ。

天和元(一六八〇)年から同三年にかけて松山城を
 修復し臥牛山の南麓に城主の居館兼政庁の御根
 小屋を築造した。貞享元(一六八四)年譜代大名に
 加えられ帝鑑間詰となる。
 父勝隆の遺業を継ぎ、新田開発に努め、城下
 町を整備し、玉島港を改修し高瀬通しを完成さ
 せるなどの治政を施す。
 元禄二(一六八七)年没 年六十七。江戸詰の生活
 が多く高輪泉岳寺に葬られた。

卷之志 水谷勝隆の胸像 P145-17 参照

△資料▽

勝宗 遺領継承時の浅口郡内十二カ村
 黒崎村 屋守村 佐見村 南浦村 長尾村 長尾
 新田 船穂村 船穂新田 柳井原村 水江村 乙
 島村 柏崎村 (玉島村・阿賀崎村の出現はこれより後)

袖木方啓 「慶応元(一八六五)〜昭和一八(一九四三)」
 本名梶雄・号玉郎、帝國大学農科に学び岡山県農
 業会幹事兼技師・銀行重役など歴任、四十才頃か
 ら詩・書・画三昧の境にひたり二十年后に一家を
 なす。日本美術協会協議員・日本文人画会顧問

補足資料

▲石門（幣帛使昇殿門）▼

銘

安政五年戊午九月吉日

中原利右衛門正喜敬立

……右柱
向って
……左柱

東參道を登りつめた正面

左京亮水谷侯嘉績詩碑の右隣にあり

安政四年（一八五六）現在の幣
拝殿再建、これに伴って松山
藩の幣帛使が昇殿する時の
専用門として甚町の豪商の
手により翌年奇進された
ものと考えられる



春爛漫 東參道の澄月歌碑・玄溪
鎌田翁碑を眺見する

水道紀功碑の碑文解説表示板



水道紀功碑

正三位勲一等 犬養毅 題頌

わが玉島町は二百余年ほど前に海を埋めて町をこしらえたところである。だから地質は塩浜であるので、なかなか清水が得られないため、住んでいる人々は長い間困っていた。ところが明治四十五年、広瀬正雄君が町長になって、いろいろ苦心の末に、高梁川のほとりの上成に井戸を掘り、さらに貯水池を吉浦、狐島の二ヶ所に設け、ここから鉄管で町まで水を引き、人家に給水する計画をたて、大正四年に着工し、翌五年六月に竣工することができた。この工事費は六万八千六百円余りかかった。

こうして清水が豊かに得られたので、住民はやっと水の悩みが解消したわけである。こういうわけで、碑を立てて永く広瀬君の功徳を忘れないようにする次第である。

柚木方啓謙 奥邸直康 書



水道紀功碑の碑文

裏書き… 大正十三年十月建之 町長 中塚 一郎

建碑委員 大野友松 亀山源兵衛 山本久一郎 三宅最平

※ 水道紀功碑の解説等の詳細については

巻之七 19520ページ参照のこと